



カット

海老原喜之助

東大医学部の白木伝次教授が

「世界」の六月号に「水俣病を追う―その医学的・社会的背景」という稿を寄せている。水俣病が発生してから八年以上を経ている

が、この病気の本格的な研究はまだ終わっていない。

それどころか改めて

再出発せねばならぬ

ものである、という。

それは現に水俣

病の患者が生存して

塔 育 集

おり、流行時に水俣地域で生まれた人たちに精薄者や脳性マヒが見られ、胎児性水俣病の可能性があるからである。さらにこの悲惨な脳病の経験から得られた知見は

脳の生理学や生化学の総合的な研究への足がかりに過ぎないし、この病気を引き起こした有機水銀は

いまでも医薬や農薬に使われているからであるとしている。

だが、最大の問題は研究態勢の面である。水俣病のように医学的

残している。

水俣病はほとんど熊大研究班の

手によつて解明された。しかしその過程にはきわめて複雑なものが

ある。一部の研究者はタリウム説を強く主張したし、中央のいわゆる「権威筋の学者」は有機水銀中

水俣病の研究態勢

に社会的に早急に原因を解明しなければならぬ場合、強力な研究チームがどのような手順で組織されるべきか、その成果が有効に生かされるためにはどうあるべきかについて、水俣病は大きな教訓を

正しい結論を出したことはすばらしいことであつた。

それにしても、そういう雑音が出たのは、初め研究チームの編成がスムーズに進まなかつたこと、それに中央の学者の理由のないシユペアリアル・コンプレックスによるところが大きい。

白木教授はこのような偏見、雑音を排しすみやかな研究を進めるには「地方、中央を一体とした研究チームの編成、真のエキスパートの動員」が必要であらうという。こういう論稿は白木氏よりむしろ地元熊大から出てしかるべきものではなかつたらうか。